



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

池井優名誉教授講義(2006年3月18日)
<池井先生の御紹介:池井ゼミOB会会長増田弘様>

本日はお忙しい中これほど沢山の方々にお越しいただきまして厚く御礼を申し上げます。
私、池井ゼミのOB会の会長をさせていただいております増田と申します。

今日、池井先生について数分で紹介せよ、というこういうご命令でございまして、これは池井先生は非常に人間性豊かでいらっしゃるし、教育者としても研究者としても多面性をお持ちでいらして、それを数分で紹介せよ、というのは私に取りましては論文を書くよりもっと難しいことございまして、先生のお人なりの一断面に一言触れさせていただいて紹介に代えさせていただくということでお許しを願いたいと思います。先生のお人柄といえば、私にとりまして大学教授らしくからぬ大学教授、というそんなことになるかと思えます。

大学教授というと雲の上の存在、なんか近寄りづらい、権威的で頑固でというイメージをお持ちかと思えます。けれども私は先生と初めてお目に掛かって以来それとはまったく逆の対角線上に立つお人柄で、非常にさわやかで、明るくて、親しみやすく、親身になって学生のことを考えてくださった、本当にいままでの先生のイメージをくつがえすようなそういう恩師でありました。

親しくお付き合いをさせていただいて分かったことでありますけれども、先生は明るい反面、大変苦勞もされておられる方でいらっしゃるし、そういうことが人一倍、私どもゼミ生のみならず、クラブやその他の面で面倒見の良さにつながったのではないかと考えております。

先生はご承知のとおり趣味も広く、しかもひとつのことに徹底して凝り性といいますが、深く掘り下げる性格でいらっしゃるし、野球についてはこれはもう、私から申し上げるまでもなく、いまやプロ並みでございますし、野球に関する本というのはおそらく10冊にもなるんじゃないでしょうか、そういう深みのある先生でいらっしゃいます。

最近と同じボールでももう少し小さなボール、ゴルフのほうにも凝っておられ、レッスンもきちっと受けられてゼミ生達と年1回のコンペも楽しみにしておられます。

先生は実は江戸っ子も密かに自負されている、粋といいましょうか、野暮を嫌うといいましょうか。そういう慶應に脈々と流れるひとつの良さであろうかとおもいますが、そうした気風をお持ちでいらっしゃいます。それが研究・教育面にもはっきりとあらわれておりまして、私事で恐縮でございますけれども、学部を終えてから大学院5年間あわせて7年以上先生の下で修行させていただいたんでありますけれども、決して研究テーマに関してこれこれしなければいけない、とかこういうテーマをしたいけれどもそれについては自分としてはあまり感心しない、とかそういうことは一切おっしゃらないで自由にやらせていただいた。漏れ伝え聞くところによれば某教授などはこんなテーマでは駄目だ、ということはかなり細かく制約されるということを耳にいたしますと、先生のもとで自由に研究をさせていただいたという恩というものを、私も歳相応になりまして日頃感ずる今日この頃でございます。

今日は先生が法学部を代表しての創立150年記念の講演をされるということで、私どもにとっては大変名誉なことでもあります。

先生の語り口は申すまでもなく放送研究会・落語研究会でも鍛え上げられた間の取り方が先生の名講義として広く知れわたっているということになり、本日に至ったということでございます。

それでは先生どうぞよろしく願いいたします。



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

< 池井先生講義：「戦後日本外交の展開とスポーツ」>

本日は400人収容の教室が一杯になるほど大勢お集まりいただき、ほっとしております。慶應義塾創設150年を記念する講義と銘打ちながら20人か30人しか出席者がいなかったらどうしようと心配しておりました。「池井に恥をかかせるな」とかってのクラスの代表はこういう呼びかけをしてくれました。「田町の駅を降りて、マージャン屋へ直行した者、キャンパスへ来たものの部室で一日中だべっていた者、あるいは必修の語学だけ出て合宿所とグランドを往復していた者、これが最後のチャンスです」。身に覚えのありそうな方もたくさんいらっしゃるようですが、そうしたことで今日これだけ大勢きてくださったことは大変うれしいことです。

今日は途中で出ていっても叱りません。昔、内山正熊先生という方は大変厳しい方で、出て行くと「待てー！」と追っかけるんですね。

だんだん神話が出来て、田町の駅まで追っかけたとか、帰ってきたときは教室の半分がいなくなっていたとか、いろんな話があります。

最近、受講のマナーも非常に変わってまいりまして、私、今ある女子大で非常勤で教えておりますけれど、先日教室に行きましたら最初から寝ているんですね。しかも居眠りじゃない、最初から最後まで寝てるんですね。僕は気分でも悪いのかと終わりにして起きて伸びをしたところで、「ちょっと待ちなさい、なんで授業きかないんですか？」と聞きましたら、「私、この授業取ってる者ではありませんから。」 啞然といたしまして「君ねえ、寝んだったらほかにいくらでもあるでしょう、僕の講義は子守唄じゃないんだよ」、「どうもすいませーん。」とかいって出てくんですね。もうぜんぜん感覚が狂っております。

私は私語をされるってのは嫌いなんです、出席は絶対取らないから後ろでこそそしゃべったりするんだったら出てこないでくれと。最近黙っているんだけど下を向いている、なんだと思ったらメール打ってるんですね、これを通称メール私語といいまして肉声私語と区別するんで。カンニングも変わってきました。昔はカンニングペーパーを一生懸命作って、手のひらに入れるとかですね、カンペ作るくらいなら覚えちゃったほうが早いんですけども。最近はひどいのになると試験 5分前にサインペンで机に書いておく、消さないで出て行っちゃう、あるいは机の脇の壁に数式が羅列してある、そういう安手のカンニングというのが出てきている。

昔はカンニングというのはだいたいノートとか参考書を机の下に引き出して見るとか、あるいは前に出来る学生を置いておいて見せてもらうとか、でした。

先ごろ亡くなりました巨人の監督をやられた藤田元司さん、あの方に直接伺ったんですけども、「前に出来る奴を座らせておいてねえ、1番の答案を書くと立ててもらうんですよ、それを写してね、それから3番を書くと垂らしてもらってね、だから僕の答案はいつも2番の答えが無くて1番と3番だけ」といわれていました。

中には昔カンニングをやった奴を監督官が見つけて追っ掛けたんですね。で、逃げた。追っかける方もしょうがないから、「ドロボー、ドロボー！」って追っかけたら、逃げるほうも「ドロボーじゃない、ドロボーじゃないー！」

<)外交に果たすスポーツの役割 >

さあ、今日はこんな話ばかりしてちゃいけないんで外交とスポーツの関係についてレジュメにそってお話をすすめてまいります。



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

< 1) 国威発揚 >

まず、外交に果たすスポーツの役割の第1は国威発揚ということであります。

ご存知のように先頃の冬季オリンピックにおきまして、日本はなかなかメダルがとれない、荒川静香が金メダル取ったらそれでもって大騒ぎをする、ワールドベースボールクラシックの日本代表、もう駄目だと思ったところがなんとアメリカがメキシコに負けてくれたおかげで、準決勝進出。二度敗れた韓国に勝って決勝でキューバを破り優勝、日本中が熱狂しました。このようにスポーツにおける自国の勝利はナショナリズムを刺激します。

中国にこんな小咄があります。「明日の人民日報売れるよ。」と新聞売り子のおばさんが言っている、「どうして?」、「だって今日中国の選手がオリンピックで大活躍したからさ。」、「あさっての新聞売れないよ。」、「どうして?」、「だって明日胡錦濤主席が人民代表大会で長い演説するからね。」

そうなんですね、社会主義国におきましてスポーツの持つ意義は非常に大きいということがあるわけでありませ

< 2) 国家の宣伝 >

第2番目は国家の宣伝に使われるということであります。

その一番良い例は1936年に行われましたベルリンのオリンピックであります。

これは別名ナチスオリンピック、あるいはヒトラーズオリンピックといわれているもの。

ヒトラーははじめベルリンでオリンピックをやることにあまり積極的ではなかったといわれております。「どうせアメリカが黒人を連れてきてメダルをかさうんだらう、これを利用してユダヤ人どもが大儲けをするんだらう。」

そうしたらゲッペルス宣伝大臣、さすがはナチスドイツでありまして宣伝省というのを作って、宣伝大臣というのを置いたんですね。このゲッペルスが、「ちょっとお待ちください、総統。もし、いまベルリンでオリンピックをやったら世界各国から選手がきます。さらにそれをカバーするためのメディアが来ます、絶好の宣伝になるとお思いになりませんか?」、「それもそうだ。」とヒトラーが俄かに乗り気になりまして、大競技場の建設に邁進をする。あるときヒトラーが建設現場の下見に行くんですね。そうすると一生懸命地面を掘っている、「何で掘っている?」、「競馬場との契約があって競馬場より高い建物と作ってはいけないので掘っているんです。」「競馬場を移せばいいじゃないか。」鶴の一声ですね。そしてベルリンオリンピックは大成功を収めますし、日本の選手も大活躍をする。同時にリーフェンシュタールという女流監督を起用いたしまして『美の祭典、民族の祭典』という記録映画を作らせました。これは今日見ましても大変芸術性豊かでありまして、かつまた各国別に、例えば日本であつたら日本人の活躍、当時朝鮮半島から日の丸をつけて出ざるを得なかった孫基禎という選手がおりますけれどもこのマラソンのシーン、顔をゆがめて苦しそうに走る選手をまず表情を映し、今度は影だけをずっと追って行くんですね。それから100mでも昔は前から撮る、横から撮るんですけども、滑車を使ってランナーと一緒に映写機を回したりというようなことまでやって非常に成功したわけでありませ

< 3) 友好・交流の手段 >

外交に果たすスポーツの役割の第3番目は友好交流の手段として活用するということでありませ



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

ご存知のようにアメリカとキューバは国交がありません。しかしながら 1999 年ボルチモアオリオールズがキューバの野球チームをオリオールズとして招待した。ご存知のようにキューバのカストロ首相は大変にスポーツが好きでありましてカストロ首相もチームを送りたい。アメリカのホワイトハウス、国務省もそれに対してビザを出す、ということで交流が実現しました。

< 4)正当性の獲得 >

第 4 番目が正統性の獲得であります。

1988 年、韓国のソウルでオリンピックが行われた。分断国家での開催であります。南北朝鮮の存在、それに加えて韓国を承認していない国は当時の中国、ソ連を含めて非常に多かった。しかしながら韓国は分断国家だからこそ平和の祭典オリンピックをやりたい、と猛烈の働きかけ、最後の投票で名古屋を打ち負かしましてソウル開催が決定しました。

その結果中国も、ソ連もやって参ります。そして韓国の発展に非常に関心を持ちまして、それが後の中韓外交正常化、ソ連と韓国の国交正常化の方向につながっていくわけであります。すなわち北朝鮮に対する優位というものをここで示すことができたわけであります。

一方、中国は中国で正当性の獲得ということであらゆる国際機関から台湾を追い出そうと試みました。国際オリンピック委員会(IOC)から台湾の追放を画策しました。台湾も最初はリパブリックオブチャイナ、中華民国の名称でなければ参加しないんだ、と言っていたのが最近では態度を変え、チャイニーズタイペイという名前でオリンピックに出ている。で、台湾の独立は認めないと二言目には言っております中国もその件に関してはあえて異議を挟まない、とこういう状況であります。

< 5)外交の手段のひとつ >

第 5 番目が外交の有力な手段のひとつとしてのスポーツであります。

これはいわゆる米中間のピンポン外交というのに典型的に現れているわけであります。

ニクソン大統領はキッシンジャー補佐官をハーバード大学から引き抜いて直属の補佐官としたわけでありまして。そして二人は考えた。今、中ソ関係は最悪である。はじめ中国とソ連はイデオロギー論争をやっていたわけでありましてけれども、やがて武力衝突にまで立ち至る。そしてダマンスキー島というところでは、中国軍がソ連の重火器兵力によって大打撃を被ったわけでありまして。大体、中国の戦争のやり方というのは人民戦争といって、奥地へ引き入れて人民の海で敵を溺れさせる、という作戦なんですね。ところがソ連はそれを百も知っておりますからダマンスキー島でダーッ！と撃っておいてサッと引く。さあ中国はびっくりいたしまして、『深く壕を掘ってソ連の奇襲攻撃に備えよう』、これをスローガンといたしまして全国で防空壕掘りはじまるという状況でありました。こうした状況をじっと見ていたのがニクソンとキッシンジャーでありました。これは「敵の敵は見方なり。」でもって中国に対してシグナルを出せば、必ず中国は我々の方向に寄って来るのではないか。

そこでまずニクソン大統領はいままで歴代大統領がレッドチャイナ、コミニストチャイナと言っていた名称を議会で初めてをピ - ブルズリパブリックオブチャイナ、中華人民共和国という正式名称で呼びます。これはやっぱりシグナルなんですね。



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

さらにまた、ニクソン大統領のお嬢さん、この方はなかなか美人であったんですけれども、アイゼンハワー元大統領の孫のデービット君と婚約をいたします。ホワイトハウス詰の記者が「大統領おめでとございます。お嬢さんご婚約なさったそうで。」「娘夫婦はいつかは中国に旅行に行くような気がするんだよ。」、と大統領。新聞記者は『ニクソン大統領、娘夫婦がいつか中国に旅行に行くかもしれないと語る。』と書きます。ニクソン大統領は誰に向かって言っているかという、その記事を読むであろう北京の周恩来に向けてのメッセージなんですね。周恩来は毎日世界各国の要人、あるいは世界各国の新聞雑誌の論調を中国語に要約した「参考資料」に毎日目を通しているんです。もちろんニクソン発言というのもそれに載る訳ですね。

あるいはアメリカの国内には『中国産品を持ち込んではいけません』という法律があったわけですが、「百ドル以内に限り持ち込んでいい。」と変更します。アメリカ人が香港や日本で購入した中国産品を持ち帰ってもいい、といろんなシグナルを出すんですね。

そのシグナルに対する有力な回答がピンポン外交であったわけでありまして。1971年名古屋で第31回世界卓球選手権大会が行われその最終日。中国の卓球代表団の代表がアメリカ代表団の団長に向かって、「この選手権大会が終わったらアメリカのチームを連れて中国にお出でになりませんか。」、スティンホーベンという団長は飛び上がるほど驚いた。名古屋からすぐ東京の駐日アメリカ大使館に電話をしたわけでありまして。駐日アメリカ大使館はすぐ、ワシントンに連絡をする。思わずニヤリといたしましたのはニクソンとキッシンジャーであります。我々は皆判断を間違えた。これは『中国がアメリカの人民に呼びかけて人民から反動的なニクソンの対中国政策というものを是正させるためのいわゆる人民外交である。』そんなことはないんですね、それははっきりとキッシンジャーの回顧録にでております。「4月6日、突破口がまったく予期していなかった方法で開かれた。日本で開催されていた世界選手権に参加中のアメリカ卓球チームが模範試合をやるために中華人民共和国に招待されたとの知らせを東京のアメリカ大使館が送ってきたのである。私はこの知らせを喜びと同時にびっくりした。対中和解努力が卓球チームの訪中という形で達成されるとは全く予期していなかったからである。私は直ちに招待の受諾を承認した。」卓球チームが行く。中国の卓球というのは強いですがアメリカでは卓球はマイナースポーツ、学生の言葉を使うと「ドマイナー」ですね。アメリカ人がピンポンをやっているのを見たことがありません。

ヒッピーのお兄ちゃんみたい選手なのがいくんですね。そうすると大歓迎を受けて、周恩来首相が「ピンポンの玉は軽いけれども我々の友情は重い。」などという大演説をぶつ、しかも東京と香港からアメリカの記者も同行していいという、まさにこのピンポンを対米和解のシグナルにうまく使った例であります。

<) 占領下の日本スポーツ >

< 1) 武道の弾圧 >

それでは本題に入りまして、「戦後日本外交の展開とスポーツ」に話を進めてまいりたいと思います。まず、日本は占領されたわけでありまして、この占領には3つの特徴があったわけでありまして。

第1はアメリカによりますほとんど“単独占領”であったということでありまして。

もちろん英連邦軍、すなわちインドとかイギリス、オーストラリア、ニュージーランドの軍隊も多少来ておりましたけれども、来るのも遅かったし帰るのも非常に早かった。したがってアメリカのほとんど単独占領であった。ということはアメリカの影響が非常に強く対日占領政策に反映されるということに他ならないということです。

第2番目は間接統治であったということでありまして。直接統治をやるには日本の降伏が思ったよりも早かった。広島、長崎に原爆が落ち、ソ連が参戦いたしましたために、もう半年か一年くらいがんばるだろうと思って



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

いたのが、1945年8月15日に天皇のご聖断によって日本がポツダム宣言受諾。ですから準備が間に合わないんですね。それと同時に、日本語の要員というものもまだ十分ではなかった。アメリカは戦時中に日本が英語を学校教育から追放していったのに対しまして、日本語と中国語の要員を言語将校として養成します。ライシャワーさんがその立案にあたったんですけれども、その中からあの日本文学のドナルド・キーンとか、あるいは川端康成の作品というものを英訳してノーベル文学賞につなげたエドワード・サイデンステッカーとか大変に優れた日本研究者もいましたけれども、どうしてもまだ数も足りない。ということで間接統治、すなわちGHQ(連合国総司令部)があって、その下に終戦連絡事務局、通称これを終連といっておりますけれども、これは外務省などで英語が非常に出来るけれども戦時中に冷や飯を食わされていたような人々がこの終戦連絡事務局に要員として登録された。そしてその下に日本政府があって、その下に日本国民。ですからGHQがその終連を通していろんな指令という形で下ろしてくるんですね。これが間接統治です。

第3番目に、時期によってアメリカの占領政策は変化をした、ということであります。アメリカの占領政策は1945年8月から52年4月まで続くわけでありましてけれども、特に初期のアメリカの対日占領政策は、民主化と徹底した非軍事化でありました。アメリカの考えによりますと、この世界でもって最悪な国が3つある。今流の表現で言うと「悪の枢軸」と言うんでしょうけれども、まずナチスドイツ、ファシストイタリー、そして軍国主義日本である。徹底的に軍港主義の芽を摘み取って民主主義を育てなければいけない。当時いわれました言葉にこういうのがあります、「ブアバットデモクラティックジャパン」、要するに貧しいけれども民主主義の花園を日本に咲かせようということでありまして。そして理想主義に燃えた連中が大勢やってくる。それがスポーツにも反映をしたわけでありまして。まず、目の敵にされたのが武道であります。剣道、柔道、弓道、薙刀。学校における武道の全面禁止が1945年の11月6日、8月に終戦で11月ですから3ヶ月もたたないうちに通達ができる。そして、大学、高校、中学などの剣道部、柔道部、弓道部は廃止。こしたなかで剣道はいかにして生き残ろうか、これを竹刀競技と名前を変えましてシャツとズボンでやるとか、フェンシングアンド剣道という名前をつけてやるとか、当時大変な苦心があったわけでありまして。

映画ではチャンバラ映画も全部禁止。ですから戦前・戦中で時代劇の大立者でありました片岡知恵蔵なんてのは困りまして結局、「6つの仮面を持った男」などというピストルを持って出てくるというような状況にさえなる。なんと面白いのはNHKが紅白歌合戦を企画いたします。そして占領軍の検閲を受けるために申し出る。「何だ?」、「今度は紅白歌合戦といって歌を通じての男性と女性のバトルである。」、といったら許可にならないんですね。「バトルとは何事だ!」、マッチといえよよかったらしいんですね。このようにいたしまして非常に厳しい弾圧が行われたわけでありましてけれども、そのひとつの例が大日本武徳会。この大日本武徳会と申しますのは日本の伝統的な武道であります柔道、剣道、弓道を広く日本国民の間に奨励をいたしまして、心身の鍛錬と武士道精神の普及を目指す民間団体ということで出来たわけでありましてけれども、なんと太平洋戦争勃発後の1942年(昭和17年)武徳会は政府軍部の直轄する公的な団体となりまして、なんと東条首相が会長になります。そして柔道、剣道、弓道に加えて銃剣術という鉄砲の先に剣をつけて突き合う、射撃もこの中に組み入れられてまさに軍国主義の一環に組み込まれてしまった。そこでもって目をつけられたんですね。しかも大日本武徳会というのは英語で何と訳すかといったら「Great Japan Military Association」という、これはいけないですね。そんなことで解散の憂き目にあったわけです。

< 2) 外来スポーツの奨励 >

一方、外来スポーツは非常に奨励されます。アメリカが目をつけたのは、日本の子供たちがゴムボー



Keio University

1858

CALAMVS

GLADIO

FORTIOR



KEIO 150

Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

ルで大いに野球を楽しんでいる。いわゆる軟式ですね。そこで当時、軟式のボールを作っておりましたが、長瀬ゴムという、長瀬の健康ボールという。当時はゴムの質が悪くて我々少年時代、ちょっと暑い日向において置くとボールが膨れてしまってソフトボールぐらいになったりですね。あるいは打つとパカーッと二つに割れて、どっち取ったらアウトだ、とかですね。そんな馬鹿な話もあったわけでありませぬけれども。まずその軟式野球ボールのためのゴムの優先配給というものをやろう。そして子供たちにベースボールの楽しさというものを教えよう。あの瀬戸内少年野球団に出てまいります、布製のグラブとか、あるいは棒杭でボールを引っ叩いての草野球にアメリカの占領政策とは大いに協力をしたということであります。

そしてさらにはまた野球場というものの建設に非常に理解を示します。当時大阪には大きな球場がなかったんですね。甲子園は別にありますけれども、そこで大阪という都市に球場がないのはおかしい、と資材を優先的に配給してくれまして大阪球場、もう今は無くなってしまいましたけれど、かつての南海ホークスのフランチャイズでありました。それを作ってくれる。さらにはまたラジオ第2放送の活用であります。当時、もちろんNHKしかありませんで、ラジオの第1放送と第2放送だったんですけれど、第2放送はお昼の時間帯はほとんど放送無しなんです。『もったいないじゃないか、放送をやれ。』そこでまず昼間はプロ野球の放送、当時まだ職業野球といっておりましたけれど、そこに出てまいりましたのが快弁といわれました志村正順というアナウンサーであります。で、志村さんがマイクに向かって『本当に、本当にお久しぶりに野球の実況をお届けいたします。』ということから始まる。そして土日はいうまでもなく東京6大学の放送をやる。やがて、自分ひとりでもってしゃべっているということに限界を感じた志村アナウンサーは、アメリカに倣って解説者を一人連れてきたらいいんじゃないだろうか。

そこで目をつけたのが松竹ロビンスの監督をやり、かつまた戦前から歌舞伎その他に非常に造詣が深かった小西得郎であります。志村さんがわぁーっとしゃべると『さあ、小西さん、今のプレーどうぞ覧になりますか？』、『何ともしましようかあ、』とあの例の小西節ですね。あるとき、巨人キャッチャーが股間にボールを当ててもがき苦しんで、『小西さん、どうしたんでしょうねえ。』で、足を蹴飛ばすんですね。『何と申しましようか、ご婦人には分らない痛みで。』という名回答というものが飛び出して小西節というのは一時、NHKの喉自慢の声帯模写にまで出るぐらいに有名になってきた。さらにまたアメリカは野球映画を通じて日本国民を教育しようというふう考えたわけであります。

皆さんご存知だと思いますけれども、『Pride of the Yankees』日本では『打撃王』と訳されまして、あのルーゲーリックの生涯というのを描いていた。俳優も一流です。ゲリー・クーパー、そして奥さんになりましたのが可憐な女優でなりましたテレサ・ライト。さらにはまたシーズンオフに山へ鉄砲を撃ちに行きまして、そして自分で自分の足を撃ってしまって再起不能といわれたモンティ・ストラットンというピッチャーが奥さんの励ましと不屈の闘志でカムバックをする。これ『ストラットンストーリー』というのが原題であります。日本では何と『甦る熱球』。ストラットンに扮しましたのがジェームス・スチュワート、奥さんがジューン・アリスンですね。も再起を始めて奥さんが、『カモン』といってミットを構え、本気になって放ると奥さんがミットでボールをうけてひっくり返るというようなシーンもあって覚えていらっしゃる方があると思うんですけれど。

このように致しまして、この外来スポーツを大いに奨励した。ただ日本にとって困りましたのは後樂園とか神宮球場が皆米軍に接收されておまして、米軍のための娯楽施設となってなかなか日本に返してもらえない、ゴルフ場もそうであります。そんなことで日本はゴルフ場と野球場の返還運動を非常に熱心に行います。ですから東京6大学野球も上井草でやったり、非常に辺鄙な思いをせざるをえなかった時期があったわけであります。一方、ゴルフも戦時中は非常に白眼視されまして、『大体ゴルフという名前はけしからん』、『じゃ、どうするか』、色々考えた末、次の3つのうちどれにするか、杖球、杖の球ですね、それから2番目が芝球、芝の球、3番目



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

が打球、結局打球となった。バンカーなどは砂窟ですね、砂の窪地ですね。パーが基準打数。キャディが球童。もうこうなってくると噴飯者でありますけれども、そうしたゴルフ場も畝を作って畑になっていたり、いろいろ苦心があって、ようやくにして返してもらおうというような状況である。あるいは「占領軍優先で、空いた時間に日本人にもプレーをさせて欲しい。」ですから早朝とか午後遅くとかにようやくやるという肩身の狭い思いでやっていたわけでありませう。

< 3)日本水泳陣の活躍 >

こうした折、素晴らしい朗報が日本にもたらされたわけでありませう。日本水泳陣の大活躍であります。当時日本大学の古橋廣之進、そして同僚の橋爪四郎。この二人が 400m、800m、1500mなどの水泳で次々と記録というものを打ち立てたわけでありませう。そしてなんとしてでも彼らをオリンピックに送りたい、と思ったわけでありませうけれども 1948 年のロンドン行われたオリンピック、日本とドイツは占領下にあるということで参加を許されなかつた。そこで、田畑日本水泳連盟会長は檄を飛ばしたわけでありませう。「よーし、それだったらオリンピックの同じ日に全日本水上選手権大会をぶっつけよう！ 記録で勝負しようではないか。」。このときのパンフレットが日本体育大学の図書館に残っておりますけれども、こう書いてあります。「序文 合宿を行うこと3回、その成果を世界に問う最良の機会を逸した。ここに止む無く日本選手権をロンドン大会と同じ日に開催し、彼我の優劣を記録の上で競うことにした。諸君の記録がロンドン大会より優れているということになればオリンピックチャンピオンは実質的にワールドチャンピオンたる栄光に浴しないことになるのである。」さあ、どうなったか、1500m自由形決勝、古橋は18分37秒フラット、そして橋爪が18分37秒8。ロンドン大会の金メダリスト、クレーンが19分18秒5なんですね、なんと40秒以上の差がある。だから一緒に泳いだら50m以上離して古橋の金、橋爪の銀というのが決定するはずであったわけでありませう。400mを泳がしても古橋が4分33秒4を出したのに対しまして、ロンドンオリンピックの金メダリストのスミスが4分41秒フラット、これも圧勝、ということであった。ところがこの記録を発表しても世界は信じません。「日本のプールは短いんじゃないのか？」、「日本にはストップウォッチが無いんじゃないのか？」ところがただ一人その記録に目を留めた人がいました。それはアメリカの全米水泳選手権大会のヘッドコーチをやっていたロバート・キップス、彼は戦前から日本水泳界と連絡があったわけでありませうけれども、すぐ、「日本水泳界の復活おめでとう。」という電報をよこします。「一緒にプールで泳がないか？来ないか？」、来ないか、といっても当時外貨も不足しておりますし、どうしようか、そうしたら南カリフォルニアの日系人の団体が「我々がお金を出すから是非日本人に来て泳いでもらいたい。」そこで古橋、橋爪以下日本選手がアメリカに出かけることになった。

そして皆天皇陛下にご挨拶をし、かつまたマッカーサーのところまで挨拶に行き、「これから占領下ですけれどいって参ります。」そうするとマッカーサーは「負けて臆せず、勝って奢らず、しっかりやってこい。」マッカーサー自身もかつてアメリカのオリンピック代表団の団長を務めたこともあって非常にスポーツに対して理解があった。一行は飛行機で行くわけでありませうけれども、当時プロペラ機でウェーキ島で給油をし、ハワイで給油をし、ロスアンゼルスに着くわけですね。選手みんなからだがなまってくるんで飛行機の中で立ち上がって皆で体操を始めるんですね。さあ、副操縦士が青くなって飛んでまいりまして、「おまえら飛行機落とす気か。」この位の知識だったんですね。ロスアンゼルスに着きまして、どうするか、まだ、日本と戦って戦死したものもあるし、必ずしも対日感情が良くない。そこでロスアンゼルスにいる日系人で非常に野菜と果物のチェーン店経営で成功したフレッド和田というこの人が自分の家を提供してくれまして、「選手諸君、全員うちに泊まりなさい。」そしてその家の周りを秘かにアメリカの武装警官が警備をするというような状況であった。で、実際にロス



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

アンゼルスで泳いだわけでありませぬ。そうしますと、日本選手がアメリカの選手に対して圧勝する。さあ、アメリカ人というのはそういうところはいいいですね。「お前たち原爆を落とされ、食べ物もろくに食べていないのにえらい!」、「時計あるか、チューインガムあるか。」ということで古橋、橋爪らのポケットにどんどん腕時計とかガムとかいろんな物が差し込まれる。そして日系人たちは戦時中アリゾナとかワイオミングなどの強制収用所に入れられてジャップ、ジャップの嵐の中で苦勞した。彼らは泣いて喜んだわけでありませぬ。リトルトーキョーで優勝パレードをやらぬか、リトルトーキョーは今では非常にイノベーションされましたが、当時は非常に安っぽい町でありませぬ。そのわずかな距離でありませぬけれども日の丸を先頭に優勝パレードをやる。さあこれでアメリカのロサンゼルスを中心とするメディアの論調は一変いたします。いままでジャップであったのがジャパニーズになります。Flying Fish of Fujiyama,フジヤマのトビウオということで一躍、古橋、橋爪をはじめとする日本人選手団はヒーローになりますし、日本におきましては号外まで飛び出すというような状況であったわけでありませぬ。

< 4)サンフランシスコシーلزの来日 >

日本人選手がロサンゼルスに行って活躍した、それでは今度はアメリカのチームを日本に呼んできて、日本のチームと戦わせようではないか、それにはやっぱり野球だ、ということで目をつけたのがサンフランシスコシーلزであります。パシフィックコーストリーグという太平洋沿岸のマイナーリーグのヤンキースのファームチームです。当時は大リーグの球団の所在地はセントルイスで止まっていた。セントルイスカージナルスですね。というのは移動が全部自動車ですから、みんな夜行列車で次の試合地に行って、そして宿泊してデーゲームをやる。当時ナイトゲームなんてありませんから。ところが戦後になって1950年代も末になってまいりますと、ブルックリンジャズが新しい転地を求めてロスアンゼルスへ、ニューヨークジャイアンツが西海岸へ、ということでサンフランシスコジャイアンツへ、ということで続々とチームが誕生する。当時はサンフランシスコにシーلزがあった。これを呼んでこよう。そして監督を務めたのはレフティ・オドールという戦前から非常に日本との関わりが強かった人であります。彼がチームを率いてやってくるようになった。ところが日本は外貨がないのですね。誰かが考えて、「シーلزがくれれば日本にいる米軍の将校と将兵が見るだろう、彼らに入場券をドルで買わせたらいいじゃないか、そしてそれを持たせて帰せばよろしいではないか。」オドール曰く「我々は儲けようと思っているわけじゃない、往復の旅費と滞在費を出してくれればギャラはいらない、もし利益がでたらそれを日本野球のためにつかってくれ。」このシーلزを迎えての日本での第一戦、巨人とやって、あの川崎徳次というピッチャーが緊張で震えながら放っているんですね。試合前に初めて後樂園球場で日の丸と星条旗が並んであがった。占領下で日の丸の掲揚は許されていなかった。そしてアメリカの国歌と同時に君が代が初めて演奏され、日本人は涙を流して喜んだわけでありませぬ。実は最初占領下の日本に対等の立場で野球チームを送ることはおかしい、という議論もあった。それじゃ在日占領米軍慰問のためということでどうだ、猛烈に反対いたしましたのが当時経済科学局の局長をやっておりましたマーカット少将とその部下のキャピィ・原田という二世であります。

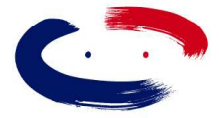
「いや、スポーツの世界においては占領者も被占領者もない、日米親善と言うことでやったらどうですか。」ということでシーلز来日はそういう意味で日本人に大変に誇りを持たせたのです。シーلزはホームランに浮かれておりました日本野球に水を差す、すなわちどんな凡プレーでも全力疾走する。しかもそのユニフォームがごてごてしていない、お洒落なんですね。我々子供たちも「今日は S 式でやろうぜ、」っていうと凡打でも全力疾走するというそういった副産物まであった。



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

そして当時のお金にして大体500万円くらいの余剰金が出たので、これをシールズ基金として日本に寄付をして、これが野球体育博物館の建設とか、あるいは日本のノンプロチームが世界ノンプロ選手権大会に参加する費用になった。まことにこのシールズの来日は大きな意味があったわけでありませう。

やがて1952年4月28日をもって日本は占領を解除されて独立をいたします。

そしてその一ヵ月後、また日本人を狂喜させる出来事が起こったわけでありませう。それは世界フライ級ボクシンググタイトルマッチにおきまして白井義男がダド・マリノというアメリカの選手を破ったことでありませう。カーン博士という占領軍と一緒に来ていた博士が白井の才能に目をつけて、一生懸命に教え込んだ。ダド・マリノというのは名前から分りますように、フィリピン系のアメリカ人でありましたけれど、とにかくカーン博士は白井に言います。「いいか、勝つんだぞ、バックに全国の日本人の願いがあることを忘れるな！」、白井が途中顔面に一発食らしまして脳震盪を起こす、そしてようやくゴングに救われて戻ってくるわけでありませう。「ウェイクアップ！ヨシオ、とにかくお前の後ろに全日本人があることを忘れるんじゃない！」で、判定勝ちをするわけでありませうけれど、白井義男は「カーン博士の言われたとおり私は日本人のために戦いました、日本人のために勝ちました。」と言って、これまた日本人を喜ばせるわけでありませう。

<)冷戦下の日本外交とスポーツ >

< 1)プロレスブーム >

こうした折にまたスーパーヒーローが登場いたします。これがプロレスの力道山であります。力道山はいまでこそ朝鮮半島の出身で、「力道山」という韓国映画も上映されましたけれども、我々100%彼のことは日本人だと思っておりましたし、彼自身も日本人であると公言していた。この力道山がいよいよ登場するということになったわけでありませう。ところが、はじめ一般の日本人にプロレスというのは分らないんですね、一体あれはスポーツなのかショーなのか、力道山は密かな自信を持っていた。これは非常にテレビ向きである。そこで力道山はアメリカからシャープ兄弟を呼んでまいります。ベン・シャープ、マイク・シャープ、二人とも1m91くらいありまして100kg近い堂々たる偉丈夫である。まさにレスラーらしいレスラーである。で、力道山は自分の息子に言ったそうでありませう。「相手は鬼畜米英を絵に描いたような大男だ、これをやっつければな、日本人は熱狂するぜ。」初日、ようやく毎日新聞がバックに入ってくれ、三菱電機がスポンサーになって4チャンネルで放映することになったわけでありませう。当時テレビの受像機は高くして庶民には買えない。そこで日本テレビの正力松太郎さんなどが考えたのは、「街頭テレビ」という発想でありませう。東京では新宿・浅草・上野といった目抜き通りに街頭テレビを置く。そして力道山が空手チョップでシャープ兄弟をたたきのめすと、もう観衆は「ウォーッ！」という騒ぎでもって車道にまで人が溢れて車にはねられる、というような騒ぎまでおこるといったことになった。そして二日目から蔵前国技館は超満員でありましたし、リングサイドの入場券は10倍でもって取引される、そして力道山は一躍日本国民のヒーローになっていったわけでありませう。力道山は技も非常に魅せたけれども、プロモータとしての能力というのも相当なものであった。どういう人と呼んでくればいいのか、どういうタイミングで空手チョップを連発すれば日本人のお客が喜ぶのか、さあ、試合終了時間まで後2分という時になると力道山が出てきて押さえ込んで1, 2, 3のレフリーのコールで勝つという出来すぎのパターンがあったわけでありませうけれども、日本人は本当に喜んだ。すなわち対米コンプレックスの完全に裏返しでもあったわけでありませう。

< 2)オリンピック招致への動きと失敗 >



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

もうひとつ日本が考えましたのはオリンピック招致への動きであります。国際社会への復帰は独立をただけではダメ、ひとつはオリンピックを日本に呼ぶこと、もうひとつは国際連合に加盟すること。国際連合の加盟はソ連が常任理事国で拒否権を持っておりますからソ連代表が「ニエツ、ノー」というと入れないんですね。そこで、まず日本とソ連の関係は国交回復していないので、まずやるのがオリンピック招致だ。1952年5月9日、日本が独立してまだ1ヶ月も経たないうちに、東京都議会はオリンピックを東京に招致したいという意向を表明して、1955年のIOC総会にかけたわけであります。なんと、日本に入りました票が4票であります。しかも2票は日本人の代表が入れたんで、実際は2票しか入らなかった。しかしながらこの時決まったのがローマ、同じ敗戦国のイタリアでのローマでやる。もちろん向こうはヨーロッパという地の利はあるけれども、日本も次に向かって頑張ろうではないか、という運動が起こってきたのです。

< 3)日中スポーツ交流 >

もうひとつの問題は日本と国交のない中国との間にどういう関係を築くか、ということであります。1952年日本は中華人民共和国とそれから台湾に逃れました中華民国、このどちらを選ぶかの選択に迫られた。実際、選択肢というものは2つしかなかったんですね。北京を選ぶか、台北をえらぶか。吉田茂という人物はしたたかな外交官であり政治家でありましたから、どう考えたか。「選択はなるべく先に延ばして情勢の推移を見極めたい。」北京も台北も選ばないでなるべく先に引き伸ばす。ところがアメリカから圧力が掛かります。ダレス特使がやって参りまして、「吉田、お前、台北の政権を選ぶ、北京政権は選ばないということを公言しない限り、サンフランシスコ講和条約は調印はしたけれど、まだ批准は残っている。アメリカの議会では批准が成り立たないかもしれない。共和党のタカ派がうるさいぞ。」、当時米国におきましては、何故我々はかつて中国との関係はよかったのかかわらず、中国大陸を失ってしまったのか、という議論が非常に盛んになっていた。そこに起こりましたのがマッカーシー旋風というんですね。マッカーシー上院議員が「何故、我々は中国を失ったのか、それは国務省に赤の手先がいたからである。私は今、そのリストを持っている。」もっともらしいんですが、これ選挙キャンペーンなんですけれども。そしてそれ以来アメリカ社会はパニック状態に陥りまして、かつて中国に勤務した、あるいは中国共産党の力は無視しえないといった報告書を書いた人はみんな中近東とかアフリカとかに飛ばされたり、あるいは国務省を辞めざるをえなかった。こうした状況のもとでダレスは吉田に強要いたします。吉田が次に考えたのが、「それじゃ地域的限定をやろうじゃないか、」、すなわち中華民国政権の現に支配下にある地域に限れば将来中国大陸を国交の対象とするときに邪魔にならないだろう、ところがダレスは「だめだ、中華民国の現に支配下にあり、または将来入るべき、ということでなければだめだ。」で、吉田さんは部下をダレスが羽田の空港を出る空港まで追っ掛けさせて、「閣下、なんとか後半の部分の切れませんか。」と言ったけど、「だめだ。」、そこで仕方がなく吉田さんは手紙を出すんですね。これが吉田書簡といわれるものであります。そこで日本はついに台湾の政権を全中国を代表する政権と認めざるをえなかった。さあ、当時の周恩来外相は激怒いたします。「こんなのは全くナンセンスである。」しかしながら日本はますます間違っていましたとは言えない。そこで中国との間には政経分離ということ、政治と経済とを分離をする。すなわち、外交的承認はしないけれども貿易は民間協定でもってやる。さらには文化交流、映画とか演劇とかスポーツの交流は大いにやりましょう。という政策というものをとるに至ったわけであります。そして、初めて中国との間のスポーツ交流が実現いたしましたのが1956年の4月のことであります。東京都体育館で行われました第23回世界卓球選手権大会に中国選手18名が参加を致します。まだ中国はそんなに卓球も強くなかった。で、中国選



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

手は日本の卓球技術を吸収し、日本の卓球関係の本を買い漁って本国に帰っていった。そして1957年には日中スポーツ交流は花を開きまして、アイスホッケーのチームが行きましたり、日本体育界の代表団が行って中国スポーツの現状を全部視察したり、あるいは早稲田大学の水泳部が訪中する。当時山中毅というオリンピックの銀メダリストもおりましたので圧勝するんでありますけれども、しかしながらやがて1958年、長崎国旗事件という、長崎のデパートに中国の国旗が飾ってありまして、これ切手と切り紙の展覧会だったわけです。そこに右翼の青年が来て、それをピッと取って持って行こうとする、で日中友好協会長崎支部の係員が追っ掛けまして、「お前なにするんだ、」、交番につき出しますと「中国面白くねえから国旗取ってきちゃったんだ、」、「そんなことするんじゃないよ。」で中国側は国旗侮辱であるという、日本の法務省は「日本は中国をまだ国家として承認しているわけじゃないから国旗ではない、器物損壊か何かで検討中である。」この辺法律家ってのは頭固いですね、そんなことで、他にも中国側にも内政的な理由もあったわけでありまして、日中関係は全面中断ということになる。そしてようやく1958年 - 59年、60年には安保闘争がありますから全然ダメ、ようやく60年代になりましてから世界卓球選手権大会に今度は日本が招待をされる、日本は中国卓球界の強力ぶりに目を見張る。日本はダブルスしか勝てない、シングルスは男女とも全部中国に取られる、というような状況になったわけでありまして。そして中国は、あの東京オリンピックで金メダルをとった女子バレーボールの「鬼の大松」と言われた大松監督を中国に招いて中国バレーのコーチをしてもらう、というようなことまでやったわけでありまして。

< 4)岸・アイゼンハワー“ゴルフ”会談 >

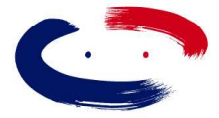
さて、面白いのは岸内閣になりまして日米安全保障条約の改定をやらなければいけない、日米安保というのは非常に不平等な条項が多い、日米新時代を築こうというのが岸さんの考え方であった。岸さんは訪米いたしましてアイゼンハワーとの間で会談をやる。岸さんはアメリカでのイメージが良くなかったんですね、東条内閣の商工大臣、パールハーバーをアタックしたときの閣僚である。しかもA級戦犯の容疑者として巣鴨に拘置されていたこともあった。なんとかして自分のイメージというのをアメリカでアップしたい。ここで考えたのがスポーツの利用であります。アイゼンハワー大統領はゴルフ狂といわれまして、8年間の大統領在任中800ラウンドやったという。これはすごいですね、1年に100回ですから本当に3日に1回はやっていたという。そしてホワイトハウスの裏庭にアプローチのための場を作らせて、ある日モグラがそれを荒らしたというので激怒したという噂の持ち主であります。で、岸さんも満州時代からゴルフは一生懸命やっていた。「そうだ、ひとつアイゼンハワー大統領との間にゴルフをやろうではないか。」そこで、6月の19日の午前中にワシントンに着いてホワイトハウスを表敬訪問する、そうするとアイゼンハワーが、「岸、よく来た。ところで今日午後空いてるか？ 疲れているか？」、「いいえ、疲れていません。」「じゃ、ゴルフやるか？」、アイゼンハワー大統領の突然の誘いに喜びながら戸惑いを隠せぬ岸首相、嘘、大嘘であります。仕組んであった。現に岸さんの愛用のクラブは日本大使館にちゃんと送ってあるんですね。そこでパーニングツリーという有名なゴルフ場でもっていいよゴルフマッチをやる。アイゼンハワーのパートナーになりましたのがブッシュ上院議員、なんと今の大統領のおじいさんであります。ブッシュ家というのは非常にスポーツマンで、お父さんの元の大統領もイェール大学野球部のファーストでキャプテンをやっていたんですね。おじいさんはゴルフのハンディ8という大変な名手であった。そこで岸さんは松本滝蔵さんという官房副長官と組んで回るようになった。さあ、ファーストショットを打つところにカメラマンがわんさと来てるんですね。アイゼンハワーがファーストショットだけ取材を許すけれどもあとはダメだと、プライベートに楽しむんだからと。当時はビデオがありませんから映写機ですね、アイモというやつですね。シャッターと回り始めるんですね。さあ岸さんここでOBだったり、チョロをやったらどうしようかと、那須与



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

一の心境だったと、それで打ったらナイスショットもナイスショットだ。これで面目を保った。アイゼンハワーがあとで「いやー、お前、チョロしたらもう一度打たせるつもりだったんだよ。」、アメリカにはマリガンというのがあってファーストショットはなんか2回打ってどっちがいい方とれるということらしいんですね。それでビル・クリントンというのはファーストショットじゃなくてほかのところでもそれをやるもんだから、マリガンじゃなくてビル・クリントンでマリガンというんだそうですけれども、で、結局どうなったかというアイゼンハワーがやっぱりうまいですね、86で回った。岸さんは「まー、スコアは勘弁してほしいけど、なにしろ100は切ったよ。」と。で二人とも名門バーニングツリーゴルフクラブの更衣室からシャワー室に行くんですね。そうするとアイゼンハワーっていうのは陸士・陸大と男の中で育っているから裸でも平気で歩くんですね、岸さんは前を押さえて恥ずかしそうに歩いたという。これまさに裸の付き合い。岸さんはこのアイゼンハワーとのゴルフ以来非常に仲が親密になってお互いに打ち解けた。晩年になってアイゼンハワーはもうグリーンに乗るとあとプラス2でパットしないんですね、ところがあるときホールインワンをやった。

「アイゼンハワー閣下、ホールインワンやられたそうでおめでとうございます。」と言ったら岸さん宛に返事が来て「ありがとう、あなたは私よりまだ若いんだからホールインワンをやるチャンスはまだあると思いますよ。」これがアイゼンハワーが外国人に出した生前最後の手紙だった、という話があるわけでありませう。

ま、このようにしてゴルフ会談を終わって安保の根回しもやりました。そして岸さんはニューヨークへやって参りまして、ヤンキーススタジアムで始球式に臨んだ。そしてヤンキースの帽子をかぶりまして嬉しそうな顔をしてボールを投げるんですね。「ゴルフが好きで、ベースボールを愛する日本のプライムミニスター岸」とマスメディアがとりあげ非常にイメージがアップするということがあったわけでありませう。

ひとつだけ余談を申し上げますと薬師寺の管長の高田後胤さんという方はこれまた野球好きなんですね、ヤンキースが大好き。「そんなに管長やりたければヤンキースに話つけるから、ニューヨークにいっちゃい、始球式させてあげるから。」「まさか坊主が始球式だけやりにニューヨークにいけまへんやろ。」そしたらたまたまロスアンゼルスのリトルトーキョーで2世フェスティバルがある、「そこでひとつ管長お説教をしなさい、講話をしなさい。丁度エンジェルス対ヤンキースの試合がアナハイムであるからそこへ招待してジャパンナイトと銘打って管長に始球式やってもらおうから。」高田さん袈裟衣に身を固めて球場に着いた。向こうの始球式は客席からやるんですね「客席からはいやや、マウンドから放らせてえな。」と言ってマウンドから放るんですね、「ショートバウンドして恨みの土がちょっとついておりましたな。」で、高田後胤さんはオール薬師寺という檀家さんの野球チームを持っているんですね、そのチームのためにヤンキースのNYという帽子を15個買った、そして帰ってきて配って、「ええな、このNYいうのはな、奈良薬師寺の略やでえ。」と言った。

これは高田後胤先生に聞いた直話でございます。

< 5)東京オリンピックの開催(1964) >

こうしておりますうちに東京でのオリンピックの開催希望ということになって、IOC委員に働きかけて票を得なければいけない。ここで非常な協力をしてくれましたのが先ほど全米選手権のときに古橋、橋爪らを泊めてくれたフレッド和田であります。彼は奥さんを連れて中南米の国々をお土産を持って歴訪する。当時日本はまだあんまり豊かではありませんから、特派大使の名称を与えるけれども何にも資金的な援助はしない、「お国のためや、祖国のためや。」といってフレッド和田は一生懸命中南米を回ってくれて、そして票固めをしてくれる。そして1959年の5月IOC総会、なんと日本は58票中34票を取りまして一発で当選、ところが日本ではオリンピックに対してあまり国民的な関心は当時盛り上がりませんでしたんですね、オリンピックが日本であることを知って



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

いますか？という3分の2は知っているけれど3分の1は知らない、じゃ知ってるといった人も、じゃいつ行われるか知っていますか？という半分くらいしか知らない、ところが盛り上がりましたのは聖火が沖縄と北海道に着いて聖火リレーが行われて北と南から聖火が日本に運ばれてくる時であったわけでありまして。そして、東京オリンピックは大成功をした。まずひとつはカラーによる衛星中継が行われたこと、さらにまた当時セキュリティの問題がありませんから、代々木の選手村で肌の色、言語の壁を越えて選手諸君が非常に親しくなった。さらにはまたマラソンのアベベをはじめと致します世界の名選手、体操のベラ・チャスラフスカ、そして日本も東洋の魔女、あの女子バレーボールをはじめといたしまして16の金メダルを獲得し盛り上がった。さらにまた経済効果がありまして東海道新幹線もできますし、首都高速、東名高速もできますし、お客様を迎えるんだということでウェスタンスタイルのホテルもできる、東京オリンピックは「フジヤマ、ゲイシャの日本」を「新幹線の日本」にイメージチェンジをした最大の転機であった。日本人もこれですっかり自信を持ったわけでありまして。

< 6)モスクワオリンピック“ボイコット”(1980) >

こうしておりますうちにひとつ問題が起こりましたのはこの1979年の12月にソ連の軍隊がアフガニスタンに入りまして親ソ派の政権を樹立するという。アフガニスタンというのはいまだにこの色々すぶっているところでありましてけれども、その新政権の基盤が非常に弱いためにソ連は戦車を中心として軍隊の駐留をさせたわけでありまして。これに対して世界は猛反発した。特にアメリカのカーター大統領は非常な不快感を示したわけでありまして。なんとかソ連軍をアフガニスタンから撤退させる方法はないだろうか、いろいろなことを考えて、その手段の一つとして選びましたのが「ソ連がアフガニスタンから軍隊を引かない限り我々はモスクワオリンピックに参加しない。」という方法であった。ところがアメリカだけ参加しないと大恥を掻きますからアメリカは特使を各国に送りまして特にスポーツ大国でありました西ドイツと日本にモスクワオリンピックに行かないで欲しいと要望した。当時日本の首相は大平さんであります。大平さんはハビブ特使が来ていたときにオーストラリア訪問中であつた。オーストラリアに「あなたのところどうですか？」「うちはでませんよ。」「そうですか。」「特別機で羽田に帰ってきますと出迎えましたのが大平首相の政治顧問をやっておりまして元池田首相の秘書官伊藤昌哉さん、伊藤さんはブーちゃんとみんなに呼ばれたんですけれども、大平首相が「ところでブーちゃん、アメリカからモスクワに行かないでくれて言ってきたけどどうしたもんだらう。」「総理、モスクワオリンピックに不参加というのは一番安上がりな対米協力かもしれませんよ。」「そうなんですか、例えば日ソ貿易を止めるとか、人事交流を停止すると問題になりますけれどもオリンピックに行かないというのは一番かわいそうなのは選手ですね。当時金メダル確実といわれたのが何人かいた。一人は柔道の山下、それからマラソンの瀬古、宗兄弟も絶好調。ですからひょっとするとマラソンで金銀銅3人が独占するかもしれなかった。ところが一番安上がりな対米協力の道を選びまして、日本は日本オリンピック委員会 JOC の大会を開いてそこでもって伊東官房長官が来て睨んでいるんですね、無記名投票をやらせると分からないから、挙手で各競技団体の意志を問います。「陸上競技連盟、参加ですか、不参加ですか？ 水泳連盟は？レスリングは？……」ということやっていくんですね、そして終に参加しない。で、モスクワ大会はそういうことでモスクワ5輪といいますがこれはもう3輪とか2輪になった大会であります。最後に閉会式のとき人文字で作った熊のミーシャがポロッと涙を流すんですね、で「次の大会で会いましょう。」という掲示がでます。ああ、これはソ連は次のロスアンゼルス大会をボイコットするなど直感しました。普通「次はロスアンゼルスで会いましょう。」となるんです。「次の大会で会いましょう。」というのは異常です。果たせるかなソ連は次のロスアンゼルス大会をボイコットした、報復ボイコット。理由は何か、アメリカに亡命を促すような動きがあって、ソ連選手と役員の身の安全が保てないから。理由は何でもつけられる



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

んでありますけれども、ということでボイコット合戦、すなわち「参加することに意義のあるオリンピック」に不参加という政治的思惑が起こったのです。

<)ポスト冷戦下の日本外交とスポーツ >

< 1)オリンピックの変質 >

さあ、そろそろ時間も押してまいりましたのでまともに入ります。まずポスト冷戦下の日本外交とスポーツです。まず、オリンピックが変質を致します。すなわち、オリンピックはかつてアマチュアの祭典であったのが今はプロも出てよろしい。プロはいろいろ要求します。「選手村なんていうところでいられるか、次の間付のスイートルームよこせ。」、さらにはまた社会主義国がかつては国力を賭けてステートアマというのを養成していた。身分は一応アマチュアなんだけれども午前中だけ仕事やって午後は全部スポーツやる、とか一年のうち半分は国外遠征に出ているとか、そうした社会主義国がだんだんスポーツから手を引き始めましたので、昔の東ドイツ、これももうスポーツ界が崩壊いたしまして、それを分析した『ガラスの金メダル』という本が出るくらいであります。ミュンヘン大会でテロを経験いたしましたけれど、いまやまさにオリンピックをはじめとする大きな大会はテロ対策に全力を注がなければならないというようなことになった。

< 2)野茂・イチロー・松井の活躍 >

日本にとりまして非常に嬉しいニュースは野茂に始まりましてイチロー、松井、というこの大リーグで活躍する日本人選手が非常に増えた。野茂は丁度大リーグがストライキをやりまして、億万長者同志のストライキだとファンがカンカンに怒ったんです。「今度再開しても俺たちがストやってやるぞ。」ファンはこんな復讐をやりました。野球場には行くんだけど、球場の中に入らないで外の駐車場でバーベキューをやって気炎をあげるとかです、非常に悪い雰囲気だった。そこへ出て参りましたのがトルネード投法の野茂であります。ですからシンシナティレッズのロン・ガントという選手は「野茂、お前は大リーグを救ってくれたぞ。」という一言をかけたということがそれに証明されておりますし、さらにイチローも非力ながら足と肩と、そして空前絶後といわれるバットコントロールを利用して、ヒットの新記録は作りますし、まさに 100 人の大使に勝る民間外交官の働きをしている。そして、日本人にとってもアメリカというのは懐の広い国じゃないか、野茂のような、あるいは松井のような日本人選手を温かく迎えてくれて新人王なり MVP をくれる。一体、もしアメリカの選手が日本に来て、実績のある大リーガーが日本で活躍して新人王出さかね、出さないだろう、アメリカって懐が広くていいじゃないか。と日本の対米イメージを好意的にし、アメリカでは野茂が黙々と投げる姿に侍の姿をダブらせて見るということ日本人のイメージを変えましたね。

< 3)ワールドカップの日韓共同開催(2002) >

そしてワールドカップの日韓共同開催。これはサッカーのワールドカップはいままで共同開催そのものがなかったわけですけど、初めての試み、そして最後に日本が負けて韓国が残ると、日本人がみんな韓国の応援に回るんですね。「テーハーミング！」、というあの応援に回ったために韓国の対日イメージというのは非常に変わった。「あれ、日本というのはいつも韓国に対して反対しているんだと思ったら案外そうでもないじゃないか、いいところあるじゃないか。」ということがこれをきっかけに起こったわけでありまして。



Keio University

1858

CALAMVS
GLADIO
FORTIOR



KEIO 150
Design the Future

2008年、創立150年を迎えます。

< 4)WBCの開催(2006) >

ご存知のようにワールドベースボールクラシックの開催、すなわち野球のグローバル化の一環でありますけれど、非常に問題が多いですね。まず、時期がいけない。すなわち公式戦の前でありますから大リーガーはみんな怪我するのを恐れてインコースのボールなどはみんな踏み込んでいかないんですね。みんな逃げちゃうんですね、ですからモチベーションが違う。一方、韓国は兵役免除してやるぞ、という。だから当たってでもいいから塁にでよう、この辺が全然違う。そしてその選手の選考もイタリア語を一言も喋れず、イタリアに行ったこともないようなマイク・ピアザがイタリア代表で出るとかですね。これも非常にやっぱり問題多いですし、ご存知のように審判もメジャーリーグの一流の審判というのは出てこない。ですから非常に誤審もありましたし、たとえばアメリカと日本戦でもって第3国の審判を出せばいいのにそれもやらない、ということでホームタウンデジジョン。どうも味方に鼻息してるんじゃないだろうか、と言われるような疑惑を持たれるという判定があって、ワールドベースボールクラシックは拙速に過ぎたのではないか、という気がしないでもないわけであります。

<)結び >

今後、スポーツはまず友好親善の手段として使われることは言うまでもありませんけれども、もうひとつやはり未承認国、いま未承認国の代表は北朝鮮ですけれどもこれは拉致問題をはじめ非常にギクシャクしている。これを解きほぐすひとつの手段がやはりスポーツである。それと同時に野球など世界的にまだ普及していない、すなわち、これロンドンオリンピックで公式種目から外されたというのはヨーロッパで野球はあまりやっていないということなんですね、ですから野球を広めるためにコーチの派遣、あるいは野球開発途上国に対する用具の提供、こうしたことをやって普及を図っていかないとやはりワールドカップ並みの、サッカー並みの世界的な規模での普及というのは無理ではないだろうか。そしてスポーツにとって一番今怖いのはいわゆるテロであります。このテロ対策に対していかに今後スポーツ関係者は意を注ぎ、また薬剤を用いてもメダルを取りたいというステロイドをはじめと致します薬物問題。こうした問題をやはり克服しない限り、スポーツが外交に果たす健全な役割というものは期待できないのではないだろうか。丁度時間も参りましたのでこれで終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。